

うるくの コネタ

ローカルなコネタ、
歴史ネタなどをご紹介

昔、『漫湖』は海みたかった？ ～漫湖の遷り変わり～

小禄地域と豊見城市にまたがる『漫湖』。昔は海や湖のように水をたたえていたそうです。



漫湖にてくり船を漕いでいる人(那覇市歴史博物館 提供)

その名の由来は“雄大な風景”から

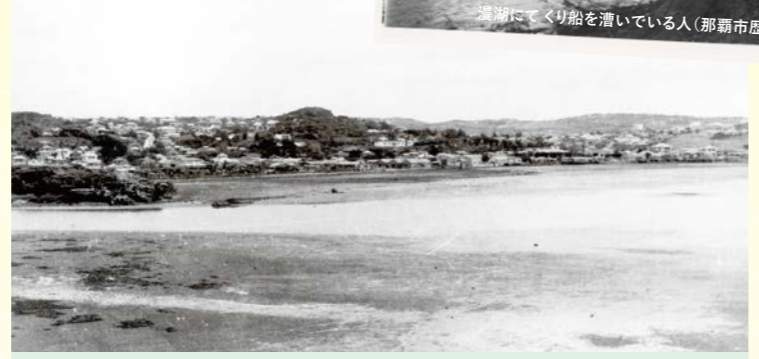
琉球王朝時代には“大湖(たいこ)”と呼ばれ、まるで湖のように満々と水をたたえていました。1600年代半ばに琉球を訪れた中国からの冊封使が、沢山の水をたたえた風景に感銘を受け『漫湖』と名付けたとされています(諸説あります)。また、奥武山から漫湖に浮かぶ小島だったガーナムイにかけての景色は、名勝中山八景の一つ「龍洞松濤(りゅうどうしょうとう)」としても知られ、かつてのこの一帯がいかに景色の美しいところだったのかがわかります。その雄大な風景は、黒船で有名なペリー提督からも絶賛されたといわれています。

埋立てによる干潟化

戦後の居住地確保のための鏡原町建設にあたり、1950年代には漫湖の一部が埋立てられました。その影響もあり、1960年代以降から干潟化が急激に進みかつては漁業の場でもあり子どもたちの遊び場でもあった漫湖はその姿を変えていきました。



壺川より小禄を望む(1958年頃)。左奥のガーナムイ(?)の周辺が多少埋立てられている様に見える。(那覇市歴史博物館 提供)



埋立て前の漫湖(1959年頃)壺川、古波蔵を奥武山側から望む。中央の小高い丘は「マカヤ毛」、左側沿岸は埋立て前の「アカバタキー」(那覇市歴史博物館 提供)

干潟やマングローブなどにより、いろいろな生き物の棲みか

干潟となった漫湖にはたくさんの水鳥が飛来し、水鳥たちの「楽園」とよばれるようになりましたが1970年代後半をピークに水鳥が減少。マングローブ林ができ始めたことで干潟面積が縮小したことなどが要因として推測され、マングローブを一部除去し水の流れを確保するなどして干潟の環境回復を行いました。こうした努力により、今では泥干潟にはカニ類やハゼ類、泥の中には貴重な貝類が生息し、それらを食べるために多くの水鳥が集まってくるようになりました。マングローブの根本には小魚たちもいます。豊富な栄養を含む干潟、漫湖には豊かな生態系があり、様々な生き物が暮らしています。また、2003年には“水鳥と湿地と人をつなぐ場所”として漫湖水鳥・湿地センターが開館。多様な生き物たちを観察でき、展示やイベントなどを通して漫湖の自然について紹介しています。



クロツラヘラサギ



漫湖水鳥・湿地センター

※参考 ・漫湖水鳥・湿地センター公式サイト(<https://www.manko-mizudori.net/>) ・漫湖水鳥・湿地センター パンフレット

長年小禄にお住まいの高良さんの記憶

「アンチャン(オキシジミ?)やクチャアンチャン(マテ貝の仲間?)といった貝に、魚やエビもとったよ。このくらの(約10cm?)白っぽいエビだった。それからターチャーというウナギの黒いのもいた。魚やウナギは手でとってたよ。水が濁って見えなから、とりあえず手突っ込むわけ。たまにガザもいれたりね。戦後は人骨もよく出てきた。漫湖の水で豆腐も作っていたよ。豆腐は基本的に

各家庭で作っていたよ。昔は海(漫湖)に行くってフューナムン(意け者)になると言ってる大人は子どもたちを漫湖に行かせたがなかった。エビや魚を捕まえるのに夢中になって畑仕事をしなくなるから。だっど3月3日のハマウィ(浜下り)の日だけは堂々と行くことができた。その日は女子どもだけじゃなくて、男もみんな一緒に海(漫湖)に行つて遊んだよ。とっても楽しかった。」

(漫湖水鳥・湿地センター発行「記憶さんぽ」2021年9月5日発行より転載)

ハーリーゆかりの地

『豊見城市 文化財要覧』によると、漫湖はハーリーゆかりの地であったようです。「かつての那覇三村のハーリーは漫湖(那覇港側)からチーヤ(津屋)に向けてハーリー舟を漕ぎ(御願ハーリー)、チーヤに着き、城内の豊見瀬御願に参拝したという。ハーリーゆかりの地であるとともに、かつて漫湖が湖上交通の要衝としてにぎわっている頃の船着き場でもあった」

「湖」と書くが実は「干潟」

漫湖は「湖」と書きますが河口にできた「干潟」です。海と同じように潮の満ち引きがあり、満潮時には海の水で満たされ、干潮時には泥干潟が広がります。様々な水鳥の飛来地・渡りの中継地となっており、1999年5月に沖縄県で最初のラムサール条約登録湿地に登録されました。

※ラムサール条約とは「特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約」のことで「総合的な湿地保全」のための条約であり「ワズユース(賢明な利用)」を義務付けていることが特徴です。



編集後記

“あの頃”から
“未来”の小禄へ

1954年に旧小禄村が那覇市に合併して今年で70年になります。合併前後の、戦後から1950年代は小禄地域にとって激動の時代でした。そうした歴史を改めて残し伝えていきたい…という想いで、今号は漫湖水鳥・湿地センターさんとの共同企画トークイベントのスペシャル号として企画しました。

その時代の地域の先輩方の頑張りがあったからこそ、今の小禄地域の繁栄があり、私たちの暮らしがあります。地域の歴史を振り返り、“あの頃の”を知ることで、地域づくりや未来の小禄地域についても考えるきっかけになればと思います。

URUKU LOCAL PRESS

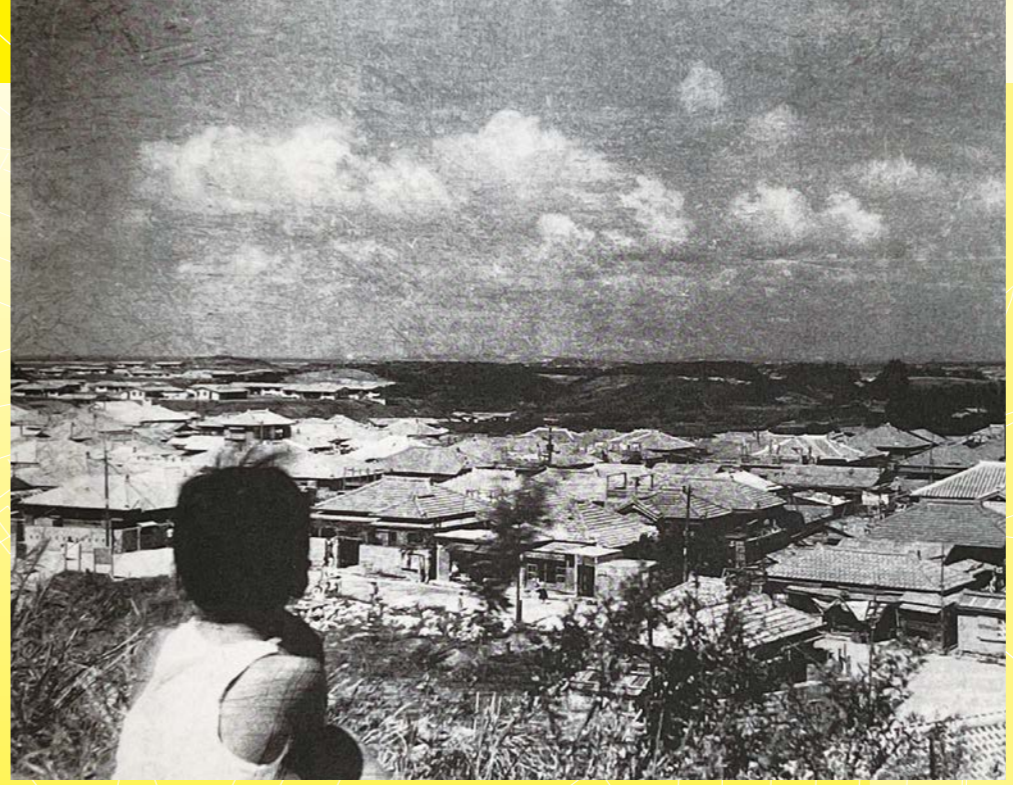
うるくローカルプレス

うるくのローカルな情報をお届け!

2024年10月
vol.17



無料 TAKE FREE



小禄村那覇市合併70周年

あの頃のうるく



漫湖水鳥・湿地センター 共同企画トークイベント スペシャル号

うるくローカルプレスの「小禄(うるく)」は、【小禄、字小禄、宇栄原、具志、高良、田原、金城あたり】としています。

URUKU LOCAL PRESS
うるくローカルプレス

WEBサイト
誌面では伝えきれない情報が満載!
<https://uruku.daikyo-k.net>

お問合せ&窓口
✉ uruku@daikyo-k.net
各SNSからのメッセージもOK!

Facebook twitter instagram youtube

うるくの情報発信局 『うるくローカルプレス』 編集部: 那覇市宇字宇栄原925番地 若葉荘1-3号室 運営: 大鏡建設株式会社(那覇市宇小禄912-1)



戦後の小禄のはじまり ～『津真田集落』～

字高良の一部と津真田地域一帯の解放

終戦後1946年2月に小禄村が解放されましたが、小禄には飛行場や軍施設などがあるため実際に解放されたのは字高良の一部と宇宇栄原の津真田地域一帯に限られていました。これらの地域は、米軍の管理下におかれ自分の土地に戻れ

ない人々に対して市町村や米軍の権限で他人所有の新たな居住地を割り当てる「住民再定住計画及び方針」により”割当土地”として指定され、自分の土地に戻れない大嶺・鏡水・安次嶺・當間・金城の人々が移り住みました。



津真田の高台から望む小禄村役場(『大嶺の今昔』より)

小禄村の中心として 一大集落に

外地や疎開先からの引揚者も同地域に集まってきて一大集落を形成するようになり、戦後の小禄村が次第に形作られる様になりました。そしてこの地域のことを、地域の原名(ハルナー)から『津真田』と呼びました。小禄村役所(現小禄南公民館敷地)を中心に、周辺には小中学校、食糧配給所、診療所、露天劇場等も出来るなど、まさに戦後の小禄はここから始まったのです。また当時は津真田にあった(現小禄南公民館そば)高良小学校の校歌には、「津真田の丘にそびえたつ清く明るい学びやよ」とあります。



1949年に映画業芝居小屋として作られた露天の小禄劇場の様子(『大嶺の今昔』より)

小禄村全人口の約70% が集住し超過密的に

米軍政府から支給される資材を使って『規格住宅』と呼ばれる簡易住宅が次々と造られました。当時2千人を想定していた居住地に1万人を超える村民が集住し、トタン葺き、茅葺きなど建てられるだけの建物を建て、ひとつ屋根の下に3世帯が同居するの珍しくなかったほど超過密的な状況になっていました。こうした状況に加え、移住してきた人々と地権者とのトラブルも絶えず、移住してきた人々を中心に新たな安住の地を求める新部落建設へと機運が高まってきました。



小禄村役所をバックに長嶺秋夫村長と村役所スタッフと各学区長(『大嶺の今昔』より)



マチグラーに続く高良大通り 1951年ごろ (『高良小中学校第6期生記念アルバム』より)



高良初等小学校(『宇栄原字誌』より)



規格住宅 (『宇栄原字誌』より)



津真田原の小禄村配給所前の人々 1949年ごろ (那覇市歴史博物館 提供)

字鏡水が漫湖の 埋立て申請を提出

津真田での大変な生活の中、字鏡水は安住の地を求めるべく1951年に字小禄後原地先の公有水面埋立申請を小禄村議会へ提出し決議され、当時の沖縄郡島知事より漫湖埋立てを許可されました。この動きが、のちの鏡原町誕生へと繋がっていくこととなります。

起伏の激しい長田原と不知嶺原の開発

長田原(ナガタバル)と不知嶺原(フチンミバル)一帯は丘あり谷ありの小禄で1番起伏が激しい地域でした。当時の小禄村村長で新部落建設期成会会長の長嶺秋夫氏は米民政府に依頼し、ブルドーザー3台の貸与とそれを動かす将兵を演習という名目で3ヶ月無料奉仕してもらったそうです。「米軍にとっては不必要な山岳地帯を開放するのは別段どうということはなかっただろうが、私どもにとって起伏の激しい原野を整地するのは一苦勞であった。」

今時の様に重機があるのでもなく、スコップだけではどうにもならなかった。米軍のブルドーザーに頼らなければとてもじゃないができることではなかった。」と長嶺氏は『小禄村誌』で回想しています。今の小禄小学校も、山を切り崩しての整地や校舍建設など米軍の協力を得て成し遂げたと語っています。こうして3ヶ月ほどで整地が完了。区画整理をし、字ごとに抽選を行い宅地を割り当てました。



新しい”安住の地”の誕生

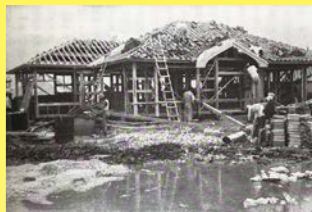
『新部落建設期成会』結成から一年後の1954年1月、新たな土地は各字・個人に振り分けられ、小禄に『新部落』が誕生。次々と瓦葺きの



田原新開地移動事務所職員1950年代 (那覇市歴史博物館 提供)



1950年頃の小禄小学校(小禄小の校長室に掲示)



住宅建築(『大嶺の今昔』より)



新部落の道路で遊ぶ子どもたち 1960年頃 (『大嶺の今昔』より)



那覇市と合併

望まれた”近隣市村”との合併

人口の都市集中傾向が顕著になり、1939年から那覇市と小禄村を含めた近隣市村の合併が具体的に話し合われていました。那覇市の人口は増え続け、衛生・交通・産業などをふまえ、近隣市村との合併が望まれました。1943年には小禄村・真和志村・那覇市・首里市を合併し新しい県都建設の機運が高まりましたが、時代は戦争へ突入していきました。

合併を伝える那覇市広報誌『市民の友』
1954年9月1日号 (那覇市歴史博物館 提供)



合併前日の小禄村役所と村会議員1954年 (那覇市歴史博物館 提供)



『大那覇市建設』を めざして

合併は戦後まで持ち越され、1954年9月1日に小禄村・首里市・那覇市が合併。小禄村は那覇市となりました。遅れて1957年に真和志市が那覇市に合併。『大那覇市』が誕生したのです。